

●新春エッセイ●

最近出会った歌たち

黒岩剛仁

年が明けると、夏には六十五歳となり二度目の定年を迎える。二十代前半より世話になって来た会社から、完全に離れることになるわけだ。うーん、それは淋しいな。

しかしながら、令和五年の夏以降、日本歌人クラブから日本全国に派遣され、当地の方々と短歌について様々に語り合う機会に恵まれるようになった。新型コロナも五類となり、もう珍しい病気ではなくなったし：（引き続き、用心は必要だが）。

そのお蔭で、毎月の「心の花」の選歌や、年に一度の日本視覚障害者連合文芸コンクルールの選考など、継続して読ませて頂いている作品以外の歌たちとも出会えるようになった。これは、嬉しい。そんな、最近出会った作品の中からいくつかを紹介したい。

・カバンごと震わせて鳴る父のスマホまだ

手術中のランプは消えず 伊藤亜佐里

十月に伺った日本歌人クラブの北陸プロック大会で、富山県知事賞を受賞された作品。歌人クラブの中央幹事で北陸プロック担当の鈴木英子さんと合議して選んだのだが、作者が明かされると「心の花」で注目している作者だった。伊藤さんはもちろん喜んで下さったが、選んだ方もビックリ。上旬の描写が的確だし、靴の中で震えているスマホと「手術中」と灯っているランプの対比も上手い。私が強く推した理由である。北日本新聞社杯の立派なカップを持つ伊藤さんの笑顔が素敵でした。

・仰向けの蟬に問ひたし死に場所を決めらるる翹なげに使はぬ 林 和代

共に選考を行なった鈴木さんが推された一首。私も、同様の題材をヘバランダに来た蟬腹を上に向け震えておれど死にし頃合

い」と詠み、「短歌研究」十月号に出したが、林作の方が瀕死の蟬に声援を送っているわけで、冷淡な私の歌よりよほど優しい。

・あと十回鳴らして待とう歩行器の姉が電話に近づくまでを 高島 玲子

鈴木さん、黒岩共に一票を投じた作品。

目には見えないが、電話のある場所まで歩行器で辿り着こうとする姉の姿を思い浮かべて待つという妹。「あと十回」との具体的な数字が効いている。

・無造作に積まれた椅子が苦しげで直してをりぬ公民館に 山中美智子

これも二人が選んだ歌。「椅子が苦しげ」だと擬人化しているが、作者自身がきちんとしていないと気持ちが悪い几帳面な性格なのだと拝察する。「公民館」という場所を明示したことも、読者に状況を共有させる上で成功している。

・遠き町とアパートの名と部屋番号閉じ込めている古き一葉 荒木 る美

この一首は、二通りに解釈できるのではないか。昔住んでいたアパートで受け取った大切な人からの葉書、または、思いを寄せる人に出そうとして出せなかった葉書か。

「記されている」ではなく「閉じ込めている」と表現されているので、私は後者だと読んだのだが、どうだろう。

富山では、大会前夜に富山県歌人連盟の会長さんたちにご馳走になった白海老と蟹味噌を和えた一品が、地元のお酒にも合って殊の外美味だった。

前に、コロナも五類となったことを記したが、コロナ禍で三年間開催できなかった日本歌人クラブ主催の全日本短歌大会と学生・ジュニア短歌大会の表彰式を実施できたことも嬉しいことだった。私も、学生・ジュニアの方の選考を担当し、今後を期待させる多くの作品と出会うことができた。

・窓際の私の手には『黒い雨』窓の外では桜舞い散る 緑川葵（中学三年）

「窓際の私の手」と「窓の外」、きちんと場所が示されている。そして、私がついている書物『黒い雨』。この歌では、小説が描いた内容やそれに対する作者の感想などは全く歌われていない。しかしながら、短歌は三十一音を超えた世界を描くことができる。それは、様々な思いを抱きつつ読んでもくれる読者が存在するから。この、作者と読者とのキャッチボールこそ、短歌の醍

醐味である。

・地引網が引き上げられた砂の上魚類図鑑の数ページになる 横道玄（中学一年）

作者は、山口県光市に在住。地引網を日常的に目にしているのだろうか。または、地引網を珍しい物として見ているのだろうか。それはどちらでもいいのだろうか。ただ、引き上げられた地引網には魚類図鑑数ページ分にも当たる、いろいろな種類の魚たちが溢れていたのである。そこでシャッターを押した感性が光る。

・富士山と茶畑広がる学校の道を聞くのは新任教師 菅原彩花（中学二年）

静岡県裾野市在住の作者である。富士山と茶畑を自慢しているような詠みぶりがい。道を教えてあげた新任教師に向かってちよつと上から目線でもある。そんな作者の胸を張っている仕草まで目に浮かび、爽やかな読後感。

・春休みおじいちゃんちのにわのおくかすかに光る雪のけっしょう 佐藤結仁（小学四年）

私は、この歌を見て、すぐに佐佐木信綱の〈ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲〉と同様のカメラズームの手

法が使われていると思った。まず季節を明らかにし、場所を大きな所から絞っていく。そして、最後に「雪のけっしょう」に焦点を当てる。実に巧みではないか。表彰式で賞状を渡した後、「君は凄い手法を使つて短歌を作ったんだよ」と作者に語り掛けた次第。結仁君はキョトンとしていました。

・告白で鼻息荒くなってきてマスクの中が二酸化炭素 齋藤陽（中学二年）

如何にもコロナ禍の中学生が遭遇しそうな状況である。下句は、かなり舌足らずな表現とも言えるが、そこにユーモアが生まれた。

・ロブノールの水面が見える張りついた砂でごろつくコンタクトレンズ 齋藤快成（短大二年）

「ロブノール」は、タクラマカン砂漠にあった塩湖で、「さまよえる湖」と呼ばれているとのこと。その語感が活かされている。「張りついた砂でごろつく」も、コンタクトレンズの使用経験がない人にまで実感が伝わるのではないか。

●新春エッセイ●

夢の木の実

奥田亡羊

明けましておめでとうございます。

新春エッセイなので、なにか明るい話題をと思うのですが、世界には重たい空気が垂れこめています。

新型コロナウイルスが蔓延した二〇二〇年から今年で四年になります。混乱はおさまりつつあるものの、この間に社会はすっかり様変わりしました。倒産する企業や閉店する商店が続出し、リモートワークの普及など、人々の働き方も変化しました。度重なるワクチン接種の人体への影響も不安視されています。大地震や火山噴火への注意喚起が、専門家を中心に声高に唱えられるようになりました。また海外に眼を向けると、二〇二二年二月に始まったロシアとウクライナの戦争は、いまだに終りが見えません。昨年の十月にはハマスのミサイル

攻撃に应じる形で、イスラエルのガザ地区への攻撃が始まりました。

こうした中、二〇二三年、心の花は創立百二十五年を迎え、十月には一五〇〇号記念号が発行されました。心の花は佐佐木信綱をはじめ、先人たちのたゆまぬ努力によつて時代の星霜を潜り抜けてきました。

佐佐木信綱は、戦後まもない一九四七年に『短歌初学』という本を出版しています。国の存亡が危ぶまれた時代に、信綱は短歌を通して、未来に何を託そうとしたのか、序文に書かれた文章を引いてみたいと思います。

「今や吾が国民のすべては、新日本建設の重大な務を負うて居る。ゆくては遙かに、苦しく険しく、又はげしく、いそがは

しいであらう。さういふ日々の精神の慰安として、心のうるほひ、心の糧として、歌を知り、歌を学び、自ら歌を作る人の多からむことを希望する。しかして、それがまた、文化日本建設の一つの道であると信じる。」

日本は一九四五年から五二年までの七年間、GHQの占領下に置かれていました。日本の前途は険しく、決して楽観視できるものではなかったと思います。その敗戦国の国民の「精神の慰安」、「心の潤い」、「心の糧」として信綱は短歌を考えていた。信綱が短歌に抱いた強い信頼を思わずにはいられません。翻つて、私自身の短歌への信頼とは何か、ということも。

信綱は言葉が続けます。

「歌は、我等の外にあるのではなく、わが胸のうちにある。喜びに、悲しみに、嘆きに、ほほゑみに、涙に、歌はある。我をつつむ四辺の光景を目にし、音響を耳にする時、日、月、星、雲を仰いでも、水の響、島の声、虫の音を聞いても、歌はおのづからわが胸にわく。都会にも、村落にも、山

岳に登つても、海辺を歩いても、混雑せる電車汽車の窓の外に囁目する眺にも、乏しいながらも楽しい家庭の夕けにも、庭畑にのびゆく胡瓜トマトの花にも、蜜柑のみのれる色にも、春夏秋冬、その折々に歌は生れる。職場の正午の休みの時間にも寮の友がたりに、麦畑を刈りつつ懸果の声を聞くにも、荷馬を追ひつつ帰る夜の道にも、楽しい生活の中に、はた苦しい生活の中に、歌はある。」

歌は折々の暮らしに触れ、心の中から生まれると言っているのですが、私には、戦争によって失われた、ひとりひとりの平和が、歌によって取り戻せると語りかけているように感じられます。

さらに信綱は続けます。

「今日の我々が、その精神をこめた歌を残しておいたならば、万葉の歌に我々が共鳴するやうに、千年二千年後のわが国民の同感するものもあるであらう。古今集の序文の末には、『古へを仰ぎて今を恋ひざらめかも』とあるが、我々の歌によつて、後の世に、昭和のこの時代をしのぶ人もある

と信ずる。」

ここにある「古へを仰ぎて今を恋ひざらめかも」は、古今集仮名序の結びの言葉です。前の部分も補つて意識すると「たとえ時が移り変わつても、この古今集が後の世に伝わるならば、歌の心のある人は、きつと古を仰ぎ、今の時代を恋ひ慕うだろう」という内容です。信綱は、未来がきつと続く、そして歌が現在と未来をつなげてくれると信じています。

信綱の言葉が私に強く響いてくるのは、信じること、それそのものを突き付けてくるからです。

・花さきみのらむは知らずいづくしみ猶も
ちいつく夢の木実を 『老松』

創立一二五周年の記念大会の座談会で、佐佐木頼綱さんが、信綱のこの歌を引いて抱負を語られました。

「花が咲くか、実るか、結果がどうなるかわからない。花が咲くからとか、実をならせるためにとかでなく、夢の木実を大切にするその気持ちこそが大事なのだ、といった内容の歌です。信綱の短歌観や美学を自分の始点にしたいと思つて模索してい

るんですが、そんな中、へ日常の中にある当たり前の気づきや、肯定の気持ちを見つめる短歌的な精神をもつて生きること」自体を信綱はかなり大切にしていたんじゃないかなあと思うようになってきました。名歌や秀歌といった結果よりも、歌を詠むという過程。そして日々の当たり前を見つめる短歌的な視点や、慈しもうという気持ち。それらを大事にしていたのではないかと。信綱のように広く短歌の良さを伝えてみようと思つて、『夢の木の実』の歌とともに提言してみました。」

柿本人麻呂は動かぬ山に向かつて「靡けこの山」と叫びました。その結果、山は動いたか。頼綱さんが言っているのはそのことだと思えます。一三〇〇年前から、「言」と「事」は遠くかけ離れていました。それを両手に掴んで離さない、それが私の思う佐佐木幸綱です。このような時代であるからこそ、希望は、希望として語られなければならない。信綱の言葉がますます響き、夢の木の実をいづくしむ歌が、これまでにない切実さで私の胸に迫るのはそのためだと思えます。

●新春エッセイ●

春の海、牧水の海

大口玲子

新春にあちこちで耳にする箏曲「春の海」。正月のテレビ番組やCM、商業施設などでも繰り返しBGMとして流れ、冒頭のメロディーがあまりに定番になり過ぎて、正月のイメージとしては「ベタな」印象さえ持たれることもあるあの曲は、昭和五（一九三〇）年の歌会始の勅題「海辺の巖」にちなんだ作られたものだという。「巖」というごつごつしたイメージは感じられないけれども、歌会始という場がきっかけとなって作られた曲だと思うと、短歌を作っている私としては少し印象が違ってくる。また、作曲した宮城道雄は瀬戸内海をイメージしていたらしい。へ瀬戸内海の島々の綺麗な感じ、それを描いたもので、ここが波の音とか、ここが鳥の声とかいっ

てしまうと面白くないが、だいたいのはこのかな波の音とか、船の櫓を漕ぐ音とか、また鳥の声というようなものを織り込んだ（宮城道雄『春の海』のことなど）随筆集『春の海』。八歳で失明した道雄は、波音や鳥の声を聞きつつ、一緒に舟に乗っていた人達からその景色を詳しくアナウンスしてもらっていたそう。随筆の名手でもあった彼の文章を読んでいると、新春の定番曲となった「春の海」から瀬戸内海のまぶしい光景が新たに立ち上がってきて、今や正月の「お約束」のように使われているメロディーが、また少し違って聞こえてくる。「春の海」は、フランス人ヴァイオリニストのルネ・シュメーが編曲して尺八のパートをヴァイオリンで演奏、道雄との

二重奏によるレコードは、日本だけでなくアメリカやフランスでも発売された。瀬戸内海をイメージした「春の海」は国境を越え、多くの人の耳に親しくなじむ海となったのである。

＊

一九二八年に生涯を終えた若山牧水は、箏曲「春の海」を知らない。そして牧水には牧水の、瀬戸内海があつたことを思う。牧水が坪谷から上京する時は、日向の細島港から船で瀬戸内海を渡り、神戸、大阪を経由して東海道本線で東京へ向かった。「（海を愛した牧水が）その時に瀬戸内海をどんなにか楽しんだかと思えます」と伊藤一彦は発言している（しまのわ二〇一四記念文学シンポジウム）。早稲田大学在学中の夏休み、帰省の途中で中国山地を旅した後、牧水は広島で南下して宮島に寄っている。「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」の歌が生まれた明治四十年の旅である。その時の「十首中国を巡りて」に海の歌がある。

海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひはかへる同じ樹蔭に

青海はにほひぬ宮の古ばしら丹なるが
淡う影うつすとき（宮島にて）

若山牧水『海の声』

前年の夏、神戸でたまたま出会った園田小枝子との大恋愛が始まろうとしていた。小枝子が生まれたのは瀬戸内海の生口島。彼女が牧水と出会う前に結婚して一時住んでいたのが、瀬戸内海のほぼ中央にある広島県の鞆。瀬戸内海は、牧水の運命の女であった小枝子のルーツであった。古くからの港として万葉集にも詠まれた鞆は、宮城道雄の父の故郷であり、道雄自身も「先祖からの土地」として大切に思っていた場所である。生口島の向かいには、牧水が滞りながら苦しみが歌集『みなかみ』を編集した岩城島があり、牧水を迎えた門下の三浦敏夫が「牧水氏と別れて」と記して残した一首には、瀬戸内海を見ていた牧水の存在感がありありと刻まれている。

瀬をはやみ潮くろぐるとながれゆくそ
の潮なりに君をしぞおもふ

三浦敏夫『島の歌碑守』

*

牧水は、宮城道雄の「春の海」を聞かなかった。海の近くに立つ原子力発電所を知らなかった。二〇二三年九月十七日、没後九十五年の牧水祭に出た後、私は日豊本線の車窓から見え隠れする海をぼんやりと眺めつつ、牧水のいない九十五年を考えた。牧水の没後四年、チッソ水俣工場は操業を開始して、有機水銀を含む工業廃水を海に排出し始めた。そして二〇二三年八月二十四日、東京電力は福島第一原子力発電所のALPS処理水の海洋放出を始めた。八月二十四日は牧水が生まれたその日である。牧水の海に、本来は自然界に存在しなかったもの、人間の手には負えなくなったものを流して捨てる。牧水のいないこの九十五年は、人間が海に対してそんなことを繰り返した九十五年ではなかったか。

*

白鳥は哀しからずや空の青海のあをに
も染まずただよふ

夜半の海汝はよく知るや魂一つここに
生きあて汝が聲を聴く

わがこころ海に吸はれぬ海すひぬその
たたかひに瞳は燃ゆるかな
春の海さして舟行く山かげの名もなき

港畫の鐘鳴る
海あをを青一しづく日の瞳に点じて春
のそら句はせむ

人といふものあり海の真青なる底にく
ぐりて魚をとりとて食む

『海の声』

かつて小澤實は、「福島第一原発事故は季語の印象を変えた」と発言し、「新米」という言葉に陰りが出てしまったのではないかと指摘した。『海の声』の「序」で牧水が「われは海の声を愛す。潮青かるが見ゆるもよし見えざるもまたあしからじ、遠くちかく、断えみたえずみ、その無限の聲の不安おほきわが胸にかよふとき、われはげに云ひがたき悲哀と慰藉とを覚えんばあらず」と書き、繰り返し詠んだ海はどうだろう。ALPS処理水の海洋放出によって、原発事故直後よりも海はさらに陰りを帯びているのではないか。すべての海は人間が作ったあらゆる境界を越え、時代を越えてつながっている。牧水が「空の青海のあを」と詠んだのと同じ海を、二〇二四年の私達は見ているのだろうか。

●新春エッセイ●

一月のうた

本田一弘

新年明けましておめでとうございます。

私の好きな一月のうたを紹介しましょう。

・正月は三日夢路に浮く船の人となりつつ
朝酒を飲む 佐佐木幸綱

三が日の間、朝からお酒を飲んだ幸綱先生。明るい酒の歌をこれまでたくさん作っていらっしやいます。正月の酒は特別。自分は夢路に浮いた船に乗った人のようにだという喩えが、正月の酒らしい陽気な気分をよく表しています。この歌が収められた歌集『テオが来た日』には「口にまず春は来るなり透き通る細魚の寿司と常温の酒」といった楽しい酒の歌もあります。

・靴紐を結ぶべく身を屈めれば全ての場所がスタートライン 山田 航
何かをしようという気持ちになったら、

すぐに始めるのがいいのです。この歌は「場所」を歌っています。靴紐を結ぶために身をかめたら、すべての場所がスタートライン。新年にふさわしい、私たちを励ましてくれる爽やかな一首ですね。二〇二四年、何か新しいことを始めてみませんか。今すぐに、この場所から。

・どうしても気に入らぬへ撥ね書き初めの月、月、月、月部屋に乱るる

和嶋 勝利
筆ふとく書きおろしゆく墨の香の匂ひにしみてたぎつ思ひや 太田 水穂

お正月といえば「書き初め」。一首目、「月」の最後の「澆ね」がどうしても気に入らず何度も何度も書き直しています。子どもの真剣な様子を優しく見つめる父親の

まなざし。簡単な字ですのでおそらく小学校の低学年でしょう。部屋中に乱れている「月」という字。「き」という音が一首を貫き、また「月」が四回繰り返されて歌われることによって、躍動感が伝わります。二首目、大きな筆で太く書きおろしていく文字。すりたての墨の香り。「匂ひ」はもともと美しい色合い、色つやを表わす言葉です。この歌でも単なる匂いではなく、墨の視覚的な美しさを含んだ香りのよさを表わしているのでしょうか。「たぎつ」は「水が激しく流れる」という意味ですが、ここでは「心が激しく動く」状態を歌っています。新しい年の始まりに際して、作者の高ぶる思いが歌から感じられます。

・天つ風をとめ死守せよ敵の眼わが姫狙ふ
豹の眼となる 岩田 正

百人一首のカルタ取りもお正月ならでは。「天つ風をとめ」とは僧正遍昭の「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しほとどめむ」という少女たちの舞姿を詠んだ一首のこと。お気に入りの札を取られくないという必死な思いがまさに「死守せよ」という語に表れています。また、その札を狙っている人を「敵」と大げさに呼び、

さらに「豹の眼」と歌ったところにもユニモラスな雰囲気が出ています。本人が真剣だからこそ、おかしみが増します。

・初、春、夏、名、秋、九と覚えたり力士にめぐる六つの季節 澤村 斉美

ふつうの人にとっては、春・夏・秋・冬という四つの季節ですが、力士にとって、初・春・夏・名古屋・秋・九州という六つの季節が巡ってくるのです。一般的常識にとらわれず、たいへんユニークな視点から生まれた一首です。力士にとって最初の季節がやってきました。初場所を迎える力士と共に今年一年頑張ります。ちなみに私の推しは若元春。福島市出身の関脇です。彼の大関昇進を心から祈っています。

・初市の雪の賑わい火の露店わが人生の起き上り小法師 福島 泰樹

「起き上り小法師」とは、大きさは3センチほどの円錐形の人形。下に錘がついているので倒しても起き上がります。会津地方に古くから伝わる縁起物の一つで、毎年一月十日に行われる初市「十日市」で売られています。「雪の賑わい」と歌われるように、その日にはよく雪が降るのです。起き上り小法師はまるで自分の人生のよう

だな、とうたう作者のしみじみとした感慨と共に初市の熱気も伝わってくる歌です。亡き人はまこと無きなり新しき年は来るともまこと亡きなり 馬場あき子

お正月の期間は、多くの人が「おめでとう」と互いに言い合って晴れやかで新たな気分になるでしょう。ただ全ての人がそうではありません。最愛の人を失い、その人の不在を噛みしめる時間でもあるのです。亡くなった人は本当にいないのだから。新しい年が来ても本当にいないのだから。「まことなきなり」という語の繰り返し切なく胸に響きます。「無」と「亡」。字の使い分けに複雑な喪失感が滲んでいます。

・試される私じゃなくて今までの私を試すセンター試験 松田 梨子

・キットカットを生徒に配りがんばれと言ひすぎてしまふセンター試験 桜川 冴子

二〇二一年から「センター試験」は「共通テスト」という名称になりました。一首目は受験生の歌です。「試験」の「試」は「試す」こと。大学や会社が主語となつて、受験生の能力・知識などを試すために問題を出して答えさせることを意味します。け

れども、一首目の「私」はちがいます。大いに「試される」のではなく、今までひたすら学んできたことを「試す」のだという心意気が頼もしい限りです。心から声援を送りたくくなります。

二首目は教員の歌。今年も朝早くから試験会場に多くの先生方が駆けつけることでしょう。歌で詠まれている「キットカット」はお菓子の名前。「きつと勝つ」に掛けて受験生に贈られるようになりました。高校教員の作者（今は大学教員をなさっています）は受験する生徒に「がんばれ」と言い過ぎてしまったのではないかと反省しており、ほろ苦い思いが読める歌です。こんなふうに生徒をあたかく見つめる先生に応援されている生徒のみなさんはいへん幸せですね。生徒にはとにかく最後まであきらめずに頑張つて（あつ、私も言っていました）ほしいと願っています。

●新春エッセイ●

一陽来復

駒田晶子

・人皆のおのもおのもの心あはせ祈らざら
めや世の平和を 『老松』 佐佐木信綱

たかなししすえ『しーちゃんのごちそう』という漫画が好きだ。1950年代に千葉県鴨川市に生まれた作者が、子どもだった頃の食卓と日常生活が描かれている。スーパーマーケットなどなかった時代の、海辺の町で暮らす小学生たち。チキンラーメンやシーチキンが世の中に出回り始め、初めて口に入れ、あまりの美味しさに感激する主人公たちの表情が、あたたかい。それぞれの家庭環境で暮らしている子どもたちが、さまざま大人たちの目配りの中で育つてゆく（もちろん耳障りなウワサ話や、口ウルサクお節介な人も登場する）。こんな子ども時代がすべての

人に与えられるのであれば、いい世の中と呼べるのだろうか…と読むたびに思う。年越しの数日間が描かれている回が、印象深い。大人たちが新年を迎えるための準備に奔走するなか、子どもたちは新年の服について、華やいで話している。近所の洋服屋のショーウィンドウに飾られている愛らしいチエック柄のワンピースを眺めていた主人公の女の子のため、母親は年末の忙しい中、夜なべしてチエック柄のジャンパースカートを縫い上げ、枕元に置いておく。目覚めた女の子は喜んで新年の晴れ着として身につける、という話。そうか、新年には、わざわざ新しい服を身につけるのか…と、心に残った。

私の子どもの頃のお正月は、のっぺりし

ていた。両親の実家が福島市内だったため、長距離移動の帰省はなし。人混みを好まず、信心深くなく、古き良きものを大切にする姿勢を好まない団塊世代の両親だったため、初売りも初詣も行ったことがなかった。親戚でも集まらない。年末年始だからといって大掃除や、おせち料理作りも、ほぼ、しなかった（飲食業に関わっていた親戚の付き合いがあり、毎年、いろいろな店のおせち料理の重箱を購入していた）。

それでも、お正月は好きだった。毎日忙しそうな両親が、唯一、ゆつくりしているように感じられたからだろう。こたつの天板を裏返し（緑色のフェルト地だったような記憶がある）、父母と私と弟の家族四人でトランプをした。私は神経衰弱が得意だった。記憶をたどって次々とトランプを裏返し、当ててゆく。すごいねえ、やつぱり得意なんだねえ、と褒められる嬉しさ。記憶違いで外してしまいトランプを裏返しに戻してゆくときのガツカリ感と、次こそは、と集中し直す高揚感。じゃあ、トランプでもするかとなり、こたつの天板を、いっせーのせつ、と家族で裏返した楽しさを、

ありありと思ひ出す。

お正月の食べ物も好きだった。スルメを細く切り、千切りにした人參と一緒に酒と醤油に漬けこむ福島郷土料理「イカ人參」。数の子を塩抜きし、水で戻した青肌豆と薄い出汁に浸したものだ。短冊切りのさまざまな野菜と凍み豆腐と、鶏肉をたっぷり入れた醤油味のお雑煮。この三品だけは毎年、母の実家の祖母や母が作り、お正月料理として味わっていた。紅白なますやレンコンの金平炒めなども出されたような気がするが、あまり覚えていないので、それほど楽しみではなかったのだろう。黒豆、栗きんとん、田作りなどは知らなかった（もちろん、購入したおせち料理の重箱には詰められていたが）。お正月料理を食べ、ミカンの皮を剥き、トランプもし尽くすとやるのがなくなり、こたつで寝ていた。こたつで寝ると風邪ひくわよ〜などと母に声をかけられながら。

・亡き父の齢も近し年越の今宵の酒は爛熱くせよ 『金色の獅子』佐佐木幸綱

そう、たった一つだけ、両親が行っていたことがある。「一陽来復」と書かれた札を、新年を迎える時刻に、その年に定めら

れている方角の天井に貼りつけていた。その札は、母の実家の祖父が用意していた。祖父は、神棚も仏壇も、どちらにも敬意を払っていた（この言い方が正しいかどうかは、わからないのだが）。毎朝、どちらにも新しく水を供え直し、手を合わせる。子ども心に、なぜ、同じような作業を二つに行う必要があるのだろうか？と思っ眺めていたのだが、まあ、そんなものなのだろうな、とも思い、理由を尋ねたことはなかった。「一陽来復」の札は、母がやりたかったのだと思う。たぶん父は、母の希望に沿っていただけだ。どっちの方角だ？そうか、向こうか、などと話しながら、脚立に乗った父がお札を貼りかえる。そののち、夫婦ふたりで静かな表情をつくり、パシンパシンと両手を打ち鳴らし、天井に貼った札に向かい、頭を垂れていた。一年の中で、その日だけ、両親は札を意識していたような気がする。仏壇の前や墓前で手を合わせている母に、訊ねたことがあった。何を考えて手を合わせているのか、と。母はしばらく考えたあと、何も考えてないなあ、無、だね、と答えた。そうか、無、か。何となく腑に落ちた私は、それから

頭の中を真っ白にして手を合わせるようになった。「一」の文字だけ太く濃く書かれていた札。あの札がどこで売られていたのか、どんな効用があったのか、私は知らない。祖父も母も亡くなり、そして十年ほど前に実家を取り壊したので、あの札を目にすることは、もう、ない。

・暮れてゆく令和三年の鐘の音しよごーん
むじょーんと響く夕空

『アボガドの種』俵万智
私の三人の子どもたちは、私の子ども時代よりももっと、のっぺりとした年末年始を過ごしている。年ごとに夫の仕事の休める期間が異なるため、夫の実家がある名古屋へ行ったり、私の父が暮らしている福島市内のマンションへ行ったり。それぞれの実家の味のお正月料理を食べたり、食べなかったり。それぞれの実家と繋がる従兄妹たちに、会えたり会えなかったり。ここ三年ほどはコロナ渦中だったため、移動も叶わなかった。わが家にはこたつがないので、リビングの床暖房の上でゴロゴロするだけ。お正月のやわらかな日差しの中で、それぞれに好きな動画などを眺めている。トランプも、しない。

●新春エッセイ●

夢野久作と佐佐木信綱と片山広子

佐佐木朋子

原口嘉代子さんが「夢野久作は「心の花」に短歌を出していたんですね」といって切り抜きをくれた。『定本夢野久作全集』全八巻が国書刊行会から完結したという朝日新聞の記事である。

どんな短歌なのかなあと、興味が湧いて、短歌が収録されている第八巻を開いてみた。

解説で、短歌史の位置づけはされていないけれど、いろんな人が注目していることが分かった。作風に石川啄木の影響を指摘した寺山修司の評論が有名なのだそう。研究者の間では雑誌「獵奇」に掲載された歌が「獵奇歌」といわれて研究対象になっている。「心の花」への投稿は大正時代なので、久作にとっては初期の作品となるら

しい。

大正五年の新春一月、久作は上京して初めて曙会に出席した。この時初めて木下利玄に会い、佐佐木信綱と同席したらしい。歌は出していない。翌二月も出席し、短歌を出している。この時の新井洗と信綱の批評のやりとりが面白いので抜きだしてみよう。かや原をわけ出でし顔おどろかしつばさ並べて水鳥の立つ

という久作の歌に、洗は、

僕には驚くのは、寧ろ水鳥の方であるやうに、考へられてならない。

と述べ、信綱は、

旅の日記の歌で面白いと思ふ。鳥が驚くよりも、こちらを驚かした所に面白味があると思ふ。わけ出でし顔といふ

句が何でもなさうであるが、さうでない句だと思ふ。

と積極的に評価した。すると洗が、

分け出でし顔が、如何にも唐突に思はれるので、前のやうな評をしたのである。

とちよつと自己弁護する。信綱は、

唐突な所に、面白味があるのではなからうか。

と、畳みかけている。どうやら信綱は短歌に詠まれた状況の面白さが気に入つたらしい。

久作を驚かせた水鳥は、「なんだ人間か」といった反応で、そつけなく飛び立つていくのだけれど、わたし（＝久作）の方は唐突な出会いによつて心がかき回される。読者はその感情を想像し、自分に引きつけて余韻を楽しむのである。歌に仕掛けがしてあると思う。

人も鳥も両方で出会い頭に驚いたけれど、気持ちが大きく動いたのが言葉を持っている人間で、鳥は羽を持っているから飛びたつていった、というのではないだろうか。

久作は福岡では「心の花」の支部のような「赤泥社」に参加している。

創作だけでなく、批評にも久作は独特な手法を持っていた。

片山広子が『翡翠』を出したとき、「心の花」では批評特集が編まれた（大正五年六月）。いろいろな筆者が書いているのだが、批評を読むと、『翡翠』収録歌には心象が矛盾する歌が眼について、統一感が削がれたり、編纂の意図が掴みきれない、という結論が大多数のようだった。歌集には読者に迫ってくるある種の「言いたいこと」があって、批評もその「言いたいこと」を評価するのが普通だったらしい。

矛盾した心象を並べているのは、考えが徹底していないのではないかと評者たちは考えたようだ。

同じ頃刊行された白岩艶子の『白楊』がテーマごとに章立てされていて、作品の配列、展開に無理がなく、読者の読解・理解を助けたことなども比較されて、『翡翠』はいっそう分が悪くなった。

たしかに広子が何かを求めて何かしらの努力をしているらしいということは、作品から伝わってくるとしても、その表現は暗示的で（象徴詩風の表現）、具体的な情報提供されてはいない。しかも作品は連作

ではなく、ゆるい連想で繋がっているだけである。一首一首の表現は考え抜かれ洗練されているのに、解釈が難しい。読者は当惑したはずである。

そして約一年後、広子自身は、短歌から海外文学の翻訳へと文学行為の焦点を移した頃、「心の花」に「翡翠を読んで」という文章が寄せられた（大正六年四月）。

筆者は初めて見る名前。文末に（香椎園芸場に於て）とあり、その園芸場には折から水蜜桃が豊作で実には袋掛けがしてあるようなことが書いてあった。この人は、地方で果物農家を営み、人生の意義に迷いつつ日々を送っていて、その日々を『翡翠』の内容に重ねている男性だろうと、勝手に人物像を作った。

その人は『翡翠』を不思議な方法で鑑賞していた。

歌集を読みおえて表紙を眺めているうちに、作者の表情がさまざまに浮かんでくると書きはじめる。その「顔つき」は、「うつとりした顔」、「さびしい顔」、「気高い顔」、「激した顔」、「悲しくほゝゑむ顔」等々である。作品から作者の表情や感情を想像することは読者なら誰もがすること

で、それほど特別ではない。

面白いのはその次の段階。その人は表情にふさわしい背景を抒景歌と組み合わせ、広子という女性のタブローを作ろうと試みる。コラーージュの手法はブラックに始まると言い（ちょうど今キュビズム展をやっている）、時代が重なる。それを言語表現でしたというのが独創的だし、第一初めての試みではないだろうか。

彼は抒景歌には「清い美しい景色」、「快よい満ち足りた有様」、「小ぢんまりした情趣」などが多く、「沈んだ顔つきと浮き立つた背景」という矛盾したタブローができあがる。そして「此女人の表情と背景とが臆気ならず矛盾して居る理由を察し得て何と無く頭の下がるのを禁じ得なかつた」と結論する。広子が目指す理想と、広子が生活している現実社会とは落差がはなはだしく、相容れないものだが、解消されることのない矛盾のなかで生きていることこそが、広子の「空虚と実在」なのだ。

数えて二十九歳、後に夢野久作と名告るようになる青年は、「杉山崩円」という道号で「心の花」に居たのである。